

お盆が終わり、ほつとしました

コロナ渦が広がって八ヶ月、人々の生活様式が変わりました。三密を避ける・人が集うときは、間隔を開ける・部屋の換気をするなどといったことが意識されて、人の集まりをなくなってきました。人と会話するときは必ずマスク着用、うがい、手洗いの励行と習慣づけられました。日本の文化が希薄になり、後生に受け継がなくなってきたように思います。本当にこれでいいのでしょうか。人として、幸せに生きるには文化を大切に守つていくことです。お盆の行事は文化であります。先祖を敬うことこそ、幸せに生きる道だと信じます。また、芝居・コンサート・落語・サークル活動も文化の一つであります。演じる、作ることができますのも幸せそのものです。こういったことがなくなりることの一挙の不安を感じます。六十一年間、生きて来て、初めての経験です。今まで当たり前のようないい寂しさを感じたことありません。早く元のくらしができるよう神仏に祈りを捧げ、自らも過去の反省に顧みなればならないと誓うことからでます。



◇お坊さんのこばなし

あるレストランで偶然隣同士のボックス席になつた二十代後半の若者の集団から聞こえてきた言葉であった「いただきます」「手をあわす合掌」を見たとき、ほっとした。この二つの行為は深い思いが込められています。合掌は自分自身の謙虚な気持ちと、合掌する相手に対する真摯な礼を表す行為といえます。これは仏教だけに限つたことではありません。日本人が古来より持つてゐることではありません。日本人が古来より持つてゐることではありません。

積まれたらどうしよう。淡々というお年寄り自身、淡々となさる修行を

いた神々への畏敬の念、信仰も同じように日本人の衣食住、文化、芸術などのしきたりや年間行事に深く結びついています。
ところが、若い世代には、宗教と名のつくものに罪悪感を抱く人たちが少なくありません。年配の世代では私は無宗教ですと話す人が増えています。私たちが意識する、しないにかかわらず、私たちの生活中にすでに宗教（生きるという教えを説く教え）が根付いていることを信じます。
争い事の絶えなかつた時代、権力抗争や名声を得る争いに明け暮れ、傷つきやすいを繰り返していく時代。その時代に「和をもつて尊し」とする仏教の教えによつて人々の目を覚まさせようとした聖徳太子の心の優しさと思いやりを持った国を作り上げようとした精神を知つてほしい。

当然、それらのことを伝え切れていらない私たち、先に生まれた大人の責任は免れません。人して年配として、僧侶として……だからこそ一人でも多くの人に伝えたいです。



老いの悲しみ

お釈迦様は、人生の苦しみだとおっしゃつて、その苦しみを生老病死の四苦とされました。この四つの苦しみは、どんな人も受けなければならぬものでこれから逃れることもできる人は一人もありません。ところで老いは、苦しみであります

が、悲しみでもあります。といいますと、目が見えなくなり、耳は遠くなり、頭はぼけてきて、そのためなんとなくとろくさくなってしまいます。その上、

どうしたものか頑固になってしまいます。こうなりますと若い人と調子が合わなくなり、こんどは親切にされたり、優しいことを言葉をかけられたら、うれしくなる。他人が喜んでくれると自分にも喜びがわいてくる。反対に他人を怒らせたり、いやな気分にさせたりしたあとは、自分にも必ずいやな気分がわいて来てしまします。



「法華經」如來壽量品の教え

仏は菩薩たちと一會する人々に告げた。

汝たちよ、如來の眞実の言葉を信じなさい。たとえば、良医がいたとして、その人は知恵を悟り薬の処方に優れて熟達しており、様々な病いを治すとしよう。その人には多くの子供たちがいて二十人、いや五十人いたとしよう。彼はたまたま

のは、物事にあつさりすること、とらわれないことがだわらないことです。淡々と生きましょうひとりばっちだと思つても決してひとりばっちはありません。お釈迦様は「この世の眞実としてこの世にあるもの、一人にあらず。とおしゃつています。でもお釈迦様は「一人でいることをすすめおられます。

ひとり座し
ひとり臥し
ひとりたえまなく遊行し、
ひとりおのれをととのえ
ひとりが寂しいというのなら、友達をつくればいい。友達とはただ人だけではありません、花や鳥、本を友達にしてもよいのです。ひとりだと思ってもひとりではないことをお釈迦様は説いておられるのです。



おこなつたあとは後悔なく、うれしく喜べることが善の行為である

「この良薬をここに置くから飲みなさい。」私は他国に行き、使いを使わした。あなたたちのお父さんはなくなつた。その悲しみから子供たちはついに心目覚め、その良薬を飲み、苦悩から除かれ、治療されたことを知り、父と再会したのである。

私は老衰して死期が近づいている。「この良薬をここに置くから飲みなさい。」私は他の子供たちのうちで元の心を失わないものは直ちに飲み治療された。元の心を失つたものは飲まない。そこで父次の言葉をいつた。

「おまえたち知りなさい」

私は老衰して死期が近づいている。

このことから、私は入滅するであろうという方便から、人々を苦惱から救い出したのであつた。この良薬をここに置くから飲みなさい。あなたたちのお父さんはなくなつた。その悲しみから子供たちはついに心目覚め、その良薬を飲み、苦悩から除かれ、治療されたことを知り、父と再会したのである。

このことから、私は入滅するであろうという方便から、人々を苦惱から救い出したのであつた。この良薬をここに置くから飲みなさい。あなたたちのお父さんはなくなつた。その悲しみから子供たちはついに心目覚め、その良薬を飲み、苦惱から除かれ、治療されたことを知り、父と再会したのである。

びんずる会の活動に参加しませんか
写経、奉仕、座禅をして、心の修養をします。
皆様のご参加をお待ちします。

発行者 高島市安曇川町田中三四五九

携帯 ○九〇一三七〇八一七二〇六

電話 ○七四〇一三二一〇七九一
ファックス ○七七一五〇二一一七九

メール info@gyokusenji.com

ホームページ 滋賀高島石仮の玉泉寺
ブログ 玉泉寺住職日記